

吉川英治作『宮本武蔵』における 石井鶴三挿絵の基礎的研究

松 本 和 也

I

昭和戦前期のベストセラー新聞連載小説に、吉川英治『宮本武蔵』（『東京／大阪朝日新聞』1935. 8. 23 タ～1939. 7. 11 タ〔全 1013 回〕）がある。同作は、日中戦争が展開されていく昭和 10 年代に広範な人気を博していくが、その要因の一つとして、挿絵の効果も見逃せない。

新聞連載時の挿絵は、前半を矢野橋村が、後半を石井鶴三⁽¹⁾が担当した。両者の挿絵が人気だったことは、その後、種々刊行されていく『宮本武蔵』単行本に挿絵が、一部ではあるが掲載されていくばかりでなく、矢野橋村・石井鶴三『吉川英治「宮本武蔵」挿絵名作集』（六興出版、1984）といった挿絵集までが出版されたことにも、如実にあらわれている。さらに、両者の挿絵については、後年、挿絵をすべて掲載した大型単行本『宮本武蔵』に寄せた「序」において、吉川英治も次のような賛辞を呈している。

宮本武蔵は、もともと新聞小説のかたちで、当時の東西両朝日へ数年間にわたって書いたものであった。従って、これには一回分毎に挿絵が添えられ、読者は日々の紙上で、小説そのものゝほかに、文画双照の趣きをも二重に見ていたわけであった。

けれど単行本となってからは、当然挿絵とは袂を別って、以後二十年余も小説は小説だけで独り歩きの重版をかさねて来た。そして糟糠の妻ともいえる当初の挿絵とは、ついぞ、それなり巡り合うことはなかったのである。

こんどの中央公論社版は、そうした懐しみを抱く人々にも、また往年の挿絵を全然見ていない以後の読書子にも、新たな期待と興をもって迎えられるのではないかと思う。

もちろん、原作者にしても、こういう新企画に異存のあろうはずはなかった。これが新聞に連載されていた間は、迂作の添彩に日々夜々の精進を共にしてくれた矢野橋村氏や石井鶴三氏のことでもある。その画業は今、一葉々々見て行ってもなつかしい思いにたえないものだし、事実、両氏の力作でもあった。こんど、久しぶりでその原画にも接してみて、今さらのように、こんなにも忠実な画稿であったかと、その良心的な仕事ぶりに驚嘆されたほどであった。唯この書も、本文のためには画稿の縮版は余儀ない結果とみられて、その為、充分なる画味画境を読者が汲むには、なおいささか小さい憾みはあった。けれどそれも私から嶋中さんにねだって、画面の拡大を乞い、すでに組みの終りかけていた版までこわして更に改版して貰ったほどなのである。そこ迄の犠牲を払った書肆の誠意は認められようし、また、橋村、鶴三両氏のこれにかけた往年の若々しい挿絵への情熱も画中に観て、読者はかならずその味読を充たすであろうと思われる⁽²⁾。

こうした著者による挿絵への高い評価も含め、『宮本武蔵』挿絵は人気が高かったのだが、こと、石井鶴三挿絵への評価は連載当時から高く、石井鶴三『「宮本武蔵」挿絵集』（朝日新聞社、1943）が刊行されるほどであった。同書には吉川英治が「鶴三氏の挿絵」と題した一文をよせ、鶴三の真摯な姿勢を、それゆえの挿絵の自律性と併せて次のように顕揚している。

鶴三氏の挿絵のみは、小説からきりはなしても、画の生命を見失ふやうな怖れはない。箇々観賞にのぼせても立派に独立しての画格と創意とをそなえてゐる。

鶴三氏自身、常にさういふ心がまへのもとに挿絵をかいてゐるにちがひない。端倪をゆるさないとは、鶴三氏が挿絵にのぞむ場合、その小説の作家に向つて、ひそかに持してゐるところの芸術的な負けじだましひと呼ぶに毫にふさはしい言葉かと思ふ。

それほど、鶴三氏は相対する作家と——否、与へられた作品と四つにくむ⁽³⁾。

さらに吉川は、新聞という媒体を計算に入れた鶴三の苦心についても次のようにふれる。

本来、凸版表現の手法と、墨一色による挿絵の至難なことはいふ迄もなく、いはゆる本格画とよばる、絹紙のうへの彩泥の仕事などよりどれほど難いものは、専門家ほどよく知悉してゐることである。

挿絵の歴史は古いが、いろいろな意味で、その至難を超えこゝまでその使命と価値を昂揚して来た氏の功績は大きい。鶴三氏の挿絵によつて、画に深い観識のなかつた民衆もどれほどその鑑画の眼を高められて來たかしれないと思ふ。

いはゆる展覧会画などの晴がましい栄誉は与へられなくとも、鶴三氏の画業は、民衆のなかに於て、当代のいかなる巨匠よりも大きな意義をもつものであると自分は信じずる⁽⁴⁾。

接の当事者以外では、尾崎秀樹が石井鶴三による挿絵こそが、『宮本武蔵』に登場するキャラクターの図像を決定づけたことを、次のように論じている。

前半を担当した矢野橋村とはことなり、石井鶴三は、武蔵をより内在的にとらえ、それを簡潔に立体的に表現している。青年武蔵はもちろん、宿敵の小次郎、悲恋のお通、お杉ばばや城太郎の像は、鶴三の筆によってイメージ化されたところが大きい⁽⁵⁾。

本稿は、このように新聞という媒体を通じて大きな「意義」を果たした石井鶴三の挿絵⁽⁶⁾について、原画、初出、各種単行本にくわえ、松本市美術館所蔵の画稿を調査対象として、情報の整理や画稿～完成稿の比較検討など、基礎的研究を進めていきたい。また、同時にこの事例研究を通じて、挿絵という問題領域の開拓可能性を検討し、今後の道標ともしたい⁽⁷⁾。

II

本節では、吉川英治『宮本武蔵』に関わって、石井鶴三が描いた挿絵の基礎情報を整理していくが、まずは、初出から昭和戦前期の単行本まで、書誌情報を確認しておきたい。

人気ゆえの長期連載となった『宮本武蔵』だが、吉川英治の従軍⁽⁸⁾に伴う休載を挟んで前後半に分節される。それは、同時に、挿絵画家の変更と軌を一にしたものでもあった。初出紙は『東京／大阪朝日新聞』夕刊⁽⁹⁾で、次のような期間に連載されていった。

前半：挿絵＝矢野橋村

「地の巻」1935年8月23日～11月17日

「水の巻」1935年11月19日～1936年3月24日

「火の巻」1936年3月25日～9月10日

(「特別回」1936年9月11日)

「風の巻」1936年9月12日～1937年5月20日

後半：挿絵＝石井鶴三

「空の巻」1938年1月5日～12月30日

(「篇外として」1938年12月31日)

「圓明の巻」1939年1月1日～7月11日

ちなみに、後半の連載に先立っては、挿絵画家の鶴三も、後半の連載予告「新春の夕刊連載小説 吉川英治作／石井鶴三画 宮本武蔵 空の巻／完結篇」(『東京朝日新聞』1937.12.12)において、次のように論及されていた。

また配する挿絵には、その人ありと知られた石井鶴三画伯の快諾を得たのであります。石井氏の挿画が常に作品を貫き躍動する登場人物を実在の人として活写して刺すところのないことは読者の夙に識らるゝところ、絶妙無二の豪華コムビと信ずる次第であります。(11面)

実際、連載を終えた後には、鶴三自身が「人物を描く苦心——私の見た宮本武蔵(三)」(『東京朝日新聞』1939.7.25)において、次のように述べている。

武蔵のやうな異常に偉大な人物は全く至難である。それに吉川氏の意向では青年武蔵のすがたを描きつゝ、其中に晩年に於ける心境まで暗示せしめようとせらるゝやに察せられるので、いよいよ難しくなるのである。挿絵画家としての味噌を云へば、方二三寸の小画面では顔の表情などは十分に現はれにくいで、身体のこなしでその人とその表情を描かんと努力したのであるが、そのへんの効果はどうであつたか。(7面)

このように、『宮本武蔵』は足かけ5年、長い休載を挟みながらも、のべ1013回の長期連載となつた人気作品であった。その後、初刊単行本は、原則として連載時の巻ごと、次のように刊行されていった。なお、「空の巻」は二分され、後半が「二天の巻」となる。

『宮本武蔵 地・水の巻』(大日本雄弁会講談社, 1936)

『宮本武蔵 水・火の巻』(大日本雄弁会講談社, 1936)

『宮本武蔵 風の巻』(大日本雄弁会講談社, 1937)

『宮本武蔵 空の巻』(大日本雄弁会講談社, 1938)

『宮本武蔵 二天の巻』(大日本雄弁会講談社, 1939)

『宮本武蔵 圓明の巻』(大日本雄弁会講談社, 1939)

この後すぐに、普及版も、次のような8巻本で刊行される。

『宮本武蔵 第一巻 地の巻・水の巻』(大日本雄弁会講談社, 1939)

- | |
|---------------------------------------|
| 『宮本武蔵 第二卷 水の巻・火の巻』(大日本雄弁会講談社, 1939) |
| 『宮本武蔵 第三巻 火の巻・風の巻』(大日本雄弁会講談社, 1939) |
| 『宮本武蔵 第四巻 風の巻』(大日本雄弁会講談社, 1940) |
| 『宮本武蔵 第五巻 風の巻・空の巻』(大日本雄弁会講談社, 1940) |
| 『宮本武蔵 第六巻 空の巻・二天の巻』(大日本雄弁会講談社, 1940) |
| 『宮本武蔵 第七巻 二天の巻・圓明の巻』(大日本雄弁会講談社, 1940) |
| 『宮本武蔵 第八巻 圓明の巻』(大日本雄弁会講談社, 1940) |

その後、先述の石井鶴三『「宮本武蔵」挿絵集』(朝日新聞社, 1943)が刊行されるところまでが、戦前に吉川英治『宮本武蔵』の鶴三挿絵が公刊された書物だということになる。

ここまで紹介してきた、吉川英治『宮本武蔵』のバリエーションには、それぞれ挿絵が付されるが、本稿で注目する石井鶴三の手になるものに限って、[表]を作成した。以下、この[表]に整理した情報のソースを明らかにしながら各項目について説明していく。

第一に、[表]は、鶴三が挿絵を担当した、のべ472回に及ぶ新聞連載時の回数を軸として作成した。連動して、小見出しと回数を、これは初出に誤りが多いので『石井鶴三全集 第七巻』(形象社, 1987)に即して整序した上で並べることとした。その上で、各回について、『東京／大阪朝日新聞』それぞれに、掲載年月日、面を記載し、さらに鶴三が描いたタイトルカットの種別もわかるようにした。なお、掲載紙は原則として夕刊であったが、年末年始などには朝刊掲載されることもあったため、その際には年月日を示す8桁の数字(YYYYMMDD)の後にアステリスク(*)を付した。「カット」は正しくはタイトルカットであり、掲載順に、便宜的に1~80と数字で区別した⁽¹⁰⁾。おおよそは、小見出しに連動して改められていくものようだが、何かしらの遅れによってかズレも多く、また、『東京／大阪朝日新聞』で不一致がみられる回も少なくない。ちなみに、『大阪毎日新聞』では、『東京朝日新聞』に比して用いられなかったタイトルカットが2種類あり、計78種しか掲出されておらず、また、タイトルカット自体が掲載されなかった日も2回あった。なお、挿絵については、『東京／大阪朝日新聞』で不一致が見られるケースはなく、欠けることもないが、製版・印刷に由来するとおぼしき、仕上がりの違いは、少なからずみられる。

これ以降、3つの項目は、初出連載時に描かれた挿絵(の画題)が、再録・書き直しなどによって単行本のかたちで複製されることによって生じたバリエーションということになる。

第一に、初刊・吉川英治『宮本武蔵〔全5巻〕』(大日本雄弁会講談社, 1936~1939)である。こちらは、新聞から単行本とサイズ・縦横比がかわったため、いずれも新たに鶴三が描いた挿絵が12点収められている。本稿では、ストーリー上の場面・位置と画題との類似によって、挿絵にゆるやかな同一性を認めることとして作業していくが、初刊単行本所収の挿絵は、初出時から大きく変わったものではなく、同一性の確認は難しくなかった。こちらでは、3冊にわたって、12枚の挿絵が本文頁の間に挟みこまれるかたちで掲出されている。

第二に、普及版・吉川英治『宮本武蔵〔全8巻〕』(大日本雄弁会講談社, 1939~1940)である。こちらでは、4冊にわたって、20枚の挿絵が本文頁の間に挟みこまれるかたちで掲出されている。なお、本文の組み方は初刊単行本と異なり、新たに組み版されたと思われるが、挿絵は初刊単行本と半数を超える11点が同一の画題となっている。もっとも、刷り上がりの印象は大きく異なるものの、目視した限りでは同一の原画によるものと思われる。

第三に、『「宮本武蔵」挿絵集』である。同書に鶴三自ら付した「卷末に」には、挿絵制作の楽屋裏を照らしだす貴重な情報が多く書きこまれている。まずは、同書に収められた挿絵の選択基準とその制作

背景について、鶴三は次のように述べている。

この画集は、昭和十三年一月より翌十四年七月まで、東京大阪両朝日新聞紙上に連載されたる、吉川英治氏作「宮本武蔵」空の巻二天の巻円明の巻の挿画として描けるものの中より、三百十八枚を選び版を新にして上梓せるものであります。選択の標準は画として出来のよいと思はれるものを第一に選び、次に欠点はあれど捨て難く思ふものを之に加へたのであります。従つて、第二選のものには筆を加へたものもあり、書きなほしたものも若干あるのであります⁽¹¹⁾。

つまり、この挿絵集は自選挿絵集であり、さらに、新たに描かれたものも含まれるというのだ。『石井鶴三全集』「『宮本武蔵』挿絵集」の項には、新聞連載時のものとは異なる「新たに描かれた挿絵と一部書き加えられた挿絵、二八点」については、挿絵とあわせて紹介されている⁽¹²⁾。従つて、[表]では新聞初出の画題を基準として、おそらくは同一の原画によって収録された挿絵については○で、上の情報により、加筆修正と判断できるものについては△で示した（選ばれなかったものはーで示し、例外的なものには注を付した）。

なお、「巻末に」に戻れば、そこで鶴三は製版についても具体的な言及をしていた。

空の巻と二天の巻の二百十二枚は濃淡のあるハイライト版で、円明の巻百六枚は線画の凸版であります。新聞の挿画は一種の版画であると心得るのであります。製版印刷の行程を経て紙上に現るべきものである以上、当然その版画としての効果を考慮に入れて、原画を執筆して居るのであります。故に之を単なる肉筆画の複製とは見られたくないであります。近来、新聞社の製版部の進歩は著しいものがあつて、優秀なる技術を見せて居たのであるが、小生がこの「宮本武蔵」挿画を執筆中、それが漸次低下の気味があり、挿画にとつては大打撃でありましたが、之は何に因るかと云ふに、製版技術者の応召出征する者続出するに至つたからで、やむを得ぬところであるが、其為、当時紙上にあらはれた挿画の効果あがらざりしは事実であります。そこで円明の巻より版式を線画の凸版に変更したのであります。といふのは、この版はハイライト版ほど製版技術の優劣が著しく現れないからであります。此度この画集の出版にあたり、版を新にしたので、ハイライト版に於て、新聞紙上掲載当時のものに比べてずつとよくなつて居ると思ひます⁽¹³⁾。

ここには、新聞小説挿絵を（原画の複製ではなく）版画だと考えていた、挿絵画家・石井鶴三の面目が躍如しているが、そうであればなおのこと、挿絵画家の技量ばかりでなく、戦局に左右されたという製版技術（者）の問題も、新聞小説の場合には、挿絵という問題領域の一部といえる。

さて[表]に戻れば、「原画」とした項目では、茨城県近代美術館所蔵の「石井鶴三 吉川英治『宮本武蔵』原画」433点と、初出版挿絵との対応関係を示すこととし、当該日の画題と同じ挿絵原画の所蔵があれば「○」、ないものは「ー」で示した⁽¹⁴⁾。

また、「画稿」という項目には、松本市美術館所蔵の石井鶴三挿絵画稿のうち、『宮本武蔵』のそれと確認できたものの枚数を、算用数字で記載した。なお、同館が所蔵する鶴三画稿は膨大な量にのぼるため、今回は閲覧をお認め頂いた範囲での調査結果となる（煩瑣になるため本稿には記載しないが、画稿にはすべて整理番号が付されている）。従つて、画稿枚数については、さらなる調査を進めれば記載数以上となることも、容易に想定される。なお、画稿については制作時期を知る手立てがないため、必ずしも初出のために描かれたものとは限らないが、今回はゆるやかな画題の同一性に即して、初出基準で画稿枚数をカウントした。現在のところ、1479点の『宮本武蔵』画稿が確認できている。

[表]

回数	小見出し・回数	『東京朝日』	面	カット	『大阪朝日』	面	カット	初刊	普及版	挿絵集	原画	画稿
1	普賢(1)	19380105	3	1	19380105	3	1			△	○	7
2	普賢(2)	19380106	4	1	19380106	3	1			○	○	2
3	普賢(3)	19380107	6	1	19380107	3	1			○	—	3
4	普賢(4)	19380108	3	1	19380108	3	1			○	○	4
5	普賢(5)	19380109	3	1	19380109	2	1			○	—	5
6	木曾冠者(1)	19380111	3	2	19380111	3	2			△	○	3
7	木曾冠者(2)	19380112	3	2	19380112	3	2			○	—	6
8	木曾冠者(3)	19380113	3	2	19380113	3	2	○	○	△	—	14
9	木曾冠者(4)	19380114	6	2	19380114	3	2			○	—	1
10	木曾冠者(5)	19380115	3	2	19380115	3	2			○	○	—
11	木曾冠者(6)	19380116	2	2	19380116	3	2			△	○	2
12	木曾冠者(7)	19380118	3	2	19380118	3	2			○	—	1
13	木曾冠者(8)	19380119	3	2	19380119	3	2			○	—	2
14	毒歯(1)	19300120	3	3	19300120	3	3			△	○	3
15	毒歯(2)	19380121	6	3	19380121	3	3			△	—	5
16	毒歯(3)	19380122	3	3	19380122	3	3			—	○	3
17	毒歯(4)	19380123	6	3	19380123	3	3			○	○	2
18	星の中(1)	19380125	3	4	19380125	3	4			※1	—	3
19	星の中(2)	19380126	3	4	19380126	3	4			△※2	○※3	3
20	星の中(3)	19380127	3	4	19380127	3	4			○	○	2
21	星の中(4)	19380128	6	4	19380128	3	4			○	○	4
22	星の中(5)	19380129	6	4	19380129	3	4			○		3
23	尊母の杖(1)	19380130	3	5	19380130	3	5			○	○	2
24	尊母の杖(2)	19380201	6	5	19380201	3	5			○	○	2
25	尊母の杖(3)	19380202	3	5	19380202	3	5			○	○	2
26	尊母の杖(4)	19380203	3	5	19380203	3	5			○	○	2
27	尊母の杖(5)	19380204	3	5	19380204	3	5		○	○	○	6
28	尊母の杖(6)	19380205	3	5	19380205	3	5			—	—	4
29	尊母の杖(7)	19380206	3	5	19380206	3	5			△	—	3
30	尊母の杖(8)	19380208	3	5	19380208	3	5			—	○	2
31	一夕の恋(1)	19380209	6	6	19380209	3	6			○	○	8
32	一夕の恋(2)	19380210	3	6	19380210	3	6			○	○	1
33	一夕の恋(3)	19380211	6	6	19380211	3	6			○	○	3
34	一夕の恋(4)	19380212	4	6	19380212	3	6			—	○	3

35	一夕の恋(5)	19380213	3	6	19380213	3	6				—	○	2
36	一夕の恋(6)	19380215	3	6	19380215	3	6				○	○	3
37	鏡(1)	19380216	3	7	19380216	3	7				○	○	1
38	鏡(2)	19380217	6	7	19380217	3	7				○	○	3
39	鏡(3)	19380218	3	7	19380218	3	7				○	○	3
40	鏡(4)	19380219	3	7	19380219	3	7				○	○	1
41	鏡(5)	19380220	6	7	19380220	3	7				—	○	2
42	鏡(6)	19380222	3	7	19380222	3	7				—	○	4
43	鏡(7)	19380223	6	7	19380223	3	7				○	○	1
44	鏡(8)	19380224	3	7	19380224	3	7				○	—	2
45	鏡(9)	19380225	3	7	19380225	3	7				○	○	2
46	蟲吹き(1)	19380226	6	8	19380226	3	8				○	○	4
47	蟲吹き(2)	19380227	3	8	19380227	3	8				○	○	6
48	蟲吹き(3)	19380301	6	8	19380301	3	8				○	○	6
49	蟲吹き(4)	19380302	3	8	19380302	3	8				○	○	3
50	蟲吹き(5)	19380303	3	8	19380303	3	8				○	○	5
51	蟲吹き(6)	19380304	3	8	19380304	3	8				○	○	3
52	下り女郎衆(1)	19380305	3	9	19380305	3	8		○		○	○	7
53	下り女郎衆(2)	19380306	3	9	19380306	3	8				○	○	4
54	下り女郎衆(3)	19380308	3	9	19380308	3	8				○	○	3
55	火悪戯(1)	19380309	6	10	19380309	3	10				○	○	1
56	火悪戯(2)	19380310	3	10	19380310	3	10				○	○	2
57	火悪戯(3)	19380311	3	10	19380311	3	10				○	○	2
58	火悪戯(4)	19380312	3	10	19380312	3	10				△	○	7
59	火悪戯(5)	19380313	6	10	19380313	3	10				△	○	10
60	火悪戯(6)	19380315	3	10	19380315	3	10				○	○	5
61	火悪戯(7)	19380316	6	10	19380316	3	10				—	○	3
62	草雲雀(1)	19380317	6	11	19380317	3	11				○	○	3
63	草雲雀(2)	19380318	3	11	19380318	3	11				○	○	4
64	草雲雀(3)	19380319	6	11	19380319	3	11				○	○	2
65	草雲雀(4)	19380320	6	11	19380320	3	11				○	○	2
66	草雲雀(5)	19380322	3	11	19380322	3	11				○	○	4
67	草分の人々(1)	19380323	6	11	19380323	3	12				○	○	2
68	草分の人々(2)	19380324	6	12	19380324	3	12				○	○	4
69	草分の人々(3)	19380325	3	12	19380325	3	12	○	○		○	○	4
70	草分の人々(4)	19380326	6	12	19380326	3	12				○	○	2

71	草分の人々(5)	19380327	3	12	19380327	3	12				—	○	4
72	喧嘩河原(1)	19380329	3	13	19380329	3	12				—	○	2
73	喧嘩河原(2)	19380330	6	13	19380330	3	13				○	○	4
74	喧嘩河原(3)	19380331	6	13	19380331	3	13				—	○	—
75	喧嘩河原(4)	19380401	6	13	19380401	3	13				—	○	3
76	喧嘩河原(5)	19380402	3	13	19380402	3	13				○	○	2
77	喧嘩河原(6)	19380403	6	13	19380403	3	13				○	○	2
78	かんな脣(1)	19380405	3	13	19380405	7	13				○	○	2
79	かんな脣(2)	19380406	3	13	19380406	3	13				○	○	3
80	かんな脣(3)	19380407	6	14	19380407	3	13				○	○	2
81	かんな脣(4)	19380408	3	14	19380408	3	13				○	○	4
82	かんな脣(5)	19380409	6	14	19380409	3	14				○	○	2
83	かんな脣(6)	19380410	7	14	19380410	3	14				○	○	6
84	梶(1)	19380412	3	15	19380412	3	14				○	○	3
85	梶(2)	19380413	6	15	19380413	3	14				○	○	1
86	梶(3)	19380414	6	15	19380414	3	15				○	○	3
87	梶(4)	19380415	6	15	19380415	3	15				○	○	1
88	梶(5)	19380416	6	15	19380416	3	15				—	—	2
89	梶(6)	19380417	6	15	19380417	3	15				—	○	2
90	梶(7)	19380419	3	15	19380419	3	15				△	○	2
91	通夜童子(1)	19380420	6	16	19380420	3	16				○	○	5
92	通夜童子(2)	19380421	6	16	19380421	3	16				○	○	1
93	通夜童子(3)	19380422	6	16	19380422	3	16	○	○	○	○	○	4
94	通夜童子(4)	19380423	3	16	19380423	3	16				○	—	3
95	通夜童子(5)	19380424	6	16	19380424	3	16				○	○	3
96	通夜童子(6)	19380426	6	16	19380426	3	16				○	○	4
97	一指さす天(1)	19380427	4	17	19380427	3	16				—	—	5
98	一指さす天(2)	19380428	6	17	19380428	3	17				△	○	2
99	一指さす天(3)	19380429	6	17	19380429	3	17				○	○	2
100	一指さす天(4)	19380430	3	17	19380430	3	17				○	○	2
101	一指さす天(5)	19380501	6	17	19380501	3	17				○	—	2
102	この師この弟子(1)	19380503	3	18	19380503	3	18				○	○	1
103	この師この弟子(2)	19380504	3	18	19380504	3	18				△	○	6
104	この師この弟子(3)	19380505	6	18	19380505	3	18				—	○	3
105	この師この弟子(4)	19380506	3	18	19380506	3	18				○	○	2
106	土匪来(1)	19380507	3	18	19380507	3	18				—	○	1

107	土匪来(2)	19380508	6	19	19380508	3	18			○	○	6
108	土匪来(3)	19380510	3	19	19380510	3	18			—	○	—
109	土匪来(4)	19380511	6	19	19380511	3	19			○	○	2
110	土匪来(5)	19380512	6	19	19380512	3	19			○	○	1
111	征夷(1)	19380513	3	20	19380513	3	19			—	○	2
112	征夷(2)	19380514	7	20	19380514	3	20			—	○	2
113	征夷(3)	19380515	3	20	19380515	3	20			○	○	2
114	征夷(4)	19380517	3	20	19380517	3	20			○	○	3
115	征夷(5)	19380518	6	20	19380518	3	20			—	○	2
116	征夷(6)	19380519	6	20	19380519	3	20			—	○	5
117	征夷(7)	19380520	6	20	19380520	3	20			○	○	4
118	卯月の頃(1)	19380521	6	21	19380521	3	21			○	○	1
119	卯月の頃(2)	19380522	6	21	19380522	3	21			△	○	5
120	卯月の頃(3)	19380524	3	21	19380524	3	21			—	○	1
121	卯月の頃(4)	19380525	6	21	19380525	3	21			○	○	1
122	卯月の頃(5)	19380526	6	21	19380526	3	21			—	○	4
123	入城府(1)	19380527	3	21	19380527	3	21			○	○	3
124	入城府(2)	19380528	6	22	19380528	3	21			○	○	1
125	入城府(3)	19380529	3	22	19380529	3	22			○	○	2
126	入城府(4)	19380531	3	22	19380531	3	22			—	○	3
127	入城府(5)	19380601	6	22	19380601	3	22			○	○	2
128	蠅(1)	19380602	6	23	19380602	3	22			—	○	2
129	蠅(2)	19380603	3	23	19380603	3	22			○	○	3
130	蠅(3)	19380604	6	23	19380604	3	23	○	○	○	○	4
131	蠅(4)	19380605	3	23	19380605	3	23			△	○	1
132	かたな談義(1)	19380607	3	24	19380607	3	23			○	○	6
133	かたな談義(2)	19380608	6	24	19380608	3	23			○	○	3
134	かたな談義(3)	19380609	6	24	19380609	3	24			○	○	1
135	かたな談義(4)	19380610	3	24	19380610	3	24			—	○	2
136	かたな談義(5)	19380611	6	24	19380611	3	24			—	○	1
137	かたな談義(6)	19380612	3	24	19380612	3	24			—	○	3
138	道草ぎつね(1)	19380614	3	25	19380614	3	24			○	○	4
139	道草ぎつね(2)	19380615	6	25	19380615	3	25			○	○	2
140	道草ぎつね(3)	19380616	6	25	19380616	3	25			○	○	2
141	道草ぎつね(4)	19380617	3	25	19380617	3	25			○	○	4
142	道草ぎつね(5)	19380618	7	25	19380618	3	25			—	○	2

143	道草ぎつね(6)	19380619	6	25	19380619	3	25			○	○	3
144	道草ぎつね(7)	19380621	3	25	19380621	3	25			—	○	3
145	懸り人(1)	19380622	3	26	19380622	3	26			—	○	4
146	懸り人(2)	19380623	6	26	19380623	3	26			—	○	7
147	懸り人(3)	19380624	6	26	19380624	3	26			○	○	1
148	飛札(1)	19380625	6	27	19380625	3	27			○	○	2
149	飛札(2)	19380626	6	27	19380626	3	27			—	○	2
150	飛札(3)	19380628	3	27	19380628	3	27			○	○	3
151	飛札(4)	19380629	6	27	19380629	3	27			—	○	4
152	飛札(5)	19380630	6	27	19380630	3	27			—	○	3
153	飛札(6)	19880701	6	27	19880701	3	27			—	○	2
154	仮名がき経典(1)	19380702	6	27	19380702	3	27			—	○	4
155	仮名がき経典(2)	19380703	6	28	19380703	3	27			—	○	3
156	仮名がき経典(3)	19380705	6	28	19380705	3	27			○	○	2
157	仮名がき経典(4)	19380706	3	28	19380706	3	28			—	○	6
158	仮名がき経典(5)	19380707	6	28	19380707	3	28			○	○	1
159	仮名がき経典(6)	19380708	6	28	19380708	3	28			—	○	3
160	血五月雨(1)	19380709	6	29	19380709	3	28			○	○	2
161	血五月雨(2)	19380710	6	29	19380710	3	28			—	○	2
162	血五月雨(3)	19380712	3	29	19380712	3	28		○	○	○	5
163	血五月雨(4)	19380713	7	29	19380713	3	28			○	○	1
164	血五月雨(5)	19380714	6	29	19380714	3	28			○	○	4
165	血五月雨(6)	19390715	3	29	19390715	3	28			—	○	3
166	血五月雨(7)	19380716	3	29	19380716	3	28			○	○	2
167	心形無業(1)	19380717	6	30	19380717	3	30			○	—	5
168	心形無業(2)	19380719	3	30	19380719	3	30			○	○	4
169	心形無業(3)	19380720	6	30	19380720	3	30			—	○	1
170	心形無業(4)	19380721	6	30	19380721	3	30			○	○	3
171	心形無業(5)	19380722	3	30	19380722	3	30			—	—	2
172	心形無業(6)	19380723	6	30	19380723	3	30			—	○	7
173	雀羅の門(1)	19380724	3	31	19380724	3	31			○	○	4
174	雀羅の門(2)	19380726	3	31	19380726	3	31			○	—	3
175	雀羅の門(3)	19380727	3	31	19380727	3	31			○	—	2
176	雀羅の門(4)	19380728	6	31	19380728	3	31			—	○	1
177	街の雑草(1)	19380729	3	32	19380729	3	31			○	○	2
178	街の雑草(2)	19380730	3	32	19380730	3	31			—	○	2

179	街の雑草(3)	19380731	3	32	19380731	3	32				—	○	4
180	街の雑草(4)	19380802	3	32	19380802	3	32				○	○	3
181	街の雑草(5)	19380803	3	32	19380803	3	32				○	○	1
182	衆口(1)	19380804	3	33	19380804	3	33				○	○	2
183	衆口(2)	19380805	3	33	19380805	3	33				—	○	2
184	衆口(3)	19380806	3	33	19380806	3	33				—	○	1
185	衆口(4)	19380807	3	33	19380807	3	33				—	○	2
186	蟲しぐれ(1)	19380809	3	33	19380809	3	33				—	○	3
187	蟲しぐれ(2)	19380810	3	34	19380810	3	33				—	○	5
188	蟲しぐれ(3)	19380811	3	34	19380811	3	34				○	○	2
189	蟲しぐれ(4)	19380812	3	34	19380812	3	34				—	○	—
190	蟲しぐれ(5)	19380813	3	34	19380813	3	34				—	○	3
191	蟲しぐれ(6)	19380814	3	34	19380814	3	34				—	○	1
192	鶯(1)	19380816	3	35	19380816	3	34				○	○	6
193	鶯(2)	19380817	3	35	19380817	3	35		○	△	○	11	
194	鶯(3)	19380818	3	35	19380818	3	35			○	○	4	
195	鶯(4)	19380819	3	35	19380819	3	35			—	○	3	
196	鶯(5)	19380820	3	35	19380820	3	35			○	○	5	
197	鶯(6)	19380821	3	35	19380821	3	35			—	○	5	
198	青い柿(1)	19380823	3	36	19380823	3	36			—	○	4	
199	青い柿(2)	19380824	3	36	19380824	3	36			—	○	2	
200	青い柿(3)	19380825	3	36	19380825	3	36			—	○	4	
201	青い柿(4)	19380826	3	36	19380826	3	36			○	○	5	
202	青い柿(5)	19380827	3	36	19380827	3	36			○	○	2	
203	青い柿(6)	19380828	3	36	19380828	3	36			○	○	2	
204	露しとゞ(1)	19380830	4	37	19380830	3	37			—	○	6	
205	露しとゞ(2)	19380831	3	37	19380831	3	37			—	○	2	
206	露しとゞ(3)	19380901	3	37	19380901	3	37	○	○	○	○	5	
207	露しとゞ(4)	19380902	3	37	19380902	3	37			○	○	2	
208	露しとゞ(5)	19380903	3	37	19380903	3	37			—	○	5	
209	露しとゞ(6)	19380904	3	37	19380904	3	37			○	○	2	
210	四賢一燈(1)	19380906	3	38	19380906	3	37			—	○	2	
211	四賢一燈(2)	19380907	3	38	19380907	3	38			—	○	5	
212	四賢一燈(3)	19380908	3	38	19380908	3	38			—	○	3	
213	四賢一燈(4)	19380909	3	38	19380909	3	38			—	○	3	
214	四賢一燈(5)	19380910	3	38	19380910	3	38		○	○	○	3	

215	四賢一燈(6)	19380911	3	38	19380911	3	38				—	—	4
216	四賢一燈(7)	19380913	3	38	19380913	3	38				—	○	2
217	槐の門(1)	19380914	3	39	19380914	3	38				—	○	4
218	槐の門(2)	19380915	3	39	19380915	3	39				○	○	3
219	槐の門(3)	19380916	3	39	19380916	3	39				△	○	3
220	槐の門(4)	19380917	3	39	19380917	3	39				○	○	2
221	槐の門(5)	19380918	3	39	19380918	3	39				○	○	2
222	さいかち坂(1)	19380920	3	40	19380920	3	40				○	○	3
223	さいかち坂(2)	19380921	3	40	19380921	3	40				○	○	3
224	さいかち坂(3)	19380922	3	40	19380922	3	40				—	○	3
225	さいかち坂(4)	19380923	3	40	19380923	3	40				—	○	2
226	忠明発狂始末(1)	19380924	3	41	19380924	3	41				○	—	3
227	忠明発狂始末(2)	19380925	4	41	19380925	3	41				—	○	2
228	忠明発狂始末(3)	19380927	3	41	19380927	3	41				○	○	3
229	忠明発狂始末(4)	19380928	3	41	19380928	3	41				○	○	2
230	忠明発狂始末(5)	19380929	3	41	19380929	3	41				○	○	2
231	忠明発狂始末(6)	19380930	3	41	19380930	3	41		○		—	○	2
232	忠明発狂始末(7)	19381001	3	41	19381001	3	41				○	○	2
233	忠明発狂始末(8)	19381002	3	41	19381002	3	41				○	○	2
234	忠明発狂始末(9)	19381004	3	41	19381004	3	41				—	○	3
235	ものゝあはれ(1)	19381005	3	42	19381005	3	42				○	○	1
236	ものゝあはれ(2)	19381006	3	42	19381006	3	42				○	○	2
237	ものゝあはれ(3)	19381007	3	42	19381007	3	42				○	○	2
238	ものゝあはれ(4)	19381008	3	42	19381008	3	42				○	○	4
239	撥(1)	19381009	3	43	19381009	3	43				○	○	2
240	撥(2)	19381011	3	43	19381011	3	43				—	○	1
241	撥(3)	19381012	3	43	19381012	3	43				○	○	—
242	撥(4)	19381013	3	43	19381013	3	43				○	○	2
243	魔の眷属(1)	19381014	3	44	19381014	3	44				○	○	1
244	魔の眷属(2)	19381015	3	44	19381015	3	44				○	○	1
245	魔の眷属(3)	19381016	3	44	19381016	3	44	○	○	○	—		3
246	魔の眷属(4)	19381019	3	44	19381019	3	44				△	○	5
247	魔の眷属(5)	19381020	4	44	19381020	3	44				○	○	4
248	八重垣紅葉(1)	19381021	3	45	19381021	3	45				○	○	3
249	八重垣紅葉(2)	19381022	3	45	19381022	3	45				○	○	2
250	八重垣紅葉(3)	19381023	3	45	19381023	3	45				○	○	3

251	八重垣紅葉(4)	19381025	3	45	19381025	3	45	○	○	○	○	7
252	八重垣紅葉(5)	19381026	3	45	19381026	3	45			○	○	1
253	八重垣紅葉(6)	19381027	3	45	19381027	3	45			○	○	1
254	八重垣紅葉(7)	19381028	3	45	19381028	3	45			○	○	3
255	八重垣紅葉(8)	19381029	3	45	19381029	3	45			○	—	2
256	下り荷駄(1)	19381030	3	45	19381030	3	45			—	○	3
257	下り荷駄(2)	19381101	3	46	19381101	3	46			○	○	2
258	下り荷駄(3)	19381102	3	46	19381102	3	46			○	○	1
259	下り荷駄(4)	19381103	3	46	19381103	3	46			○	○	2
260	漆桶(1)	19381104	4	46	19381104*	9	46			○	○	2
261	漆桶(2)	19381105	3	46	19381105	3	46			○	○	2
262	漆桶(3)	19381106	3	46	19381106	3	46			○	○	2
263	兄弟弟子(1)	19381108	3	47	19381108	3	47			○	○	2
264	兄弟弟子(2)	19381109	3	47	19381109	3	47			○	○	2
265	兄弟弟子(3)	19381110	3	47	19381110	3	47			○	○	3
266	兄弟弟子(4)	19381111	3	47	19381111	3	47			○	○	1
267	兄弟弟子(5)	19381112	3	47	19381112	3	47			○	○	4
268	大事(1)	19381113	3	47	19381113	3	47			○	○	4
269	大事(2)	19381115	3	47	19381115	3	47			△	○	4
270	大事(3)	19381116	3	47	19381116	3	47			—	○	3
271	大事(4)	19381117	3	48	19381117	3	48			○	○	1
272	大事(5)	19381118	3	48	19381118	3	48			○	○	4
273	大事(6)	19381119	3	48	19381119	3	48			○	○	4
274	大事(7)	19381120	3	48	19381120	3	48			○	○	1
275	石榴の傷み(1)	19381122	3	49	19381122	3	48			—	○	3
276	石榴の傷み(2)	19381123	3	49	19381123	3	49			○	○	3
277	石榴の傷み(3)	19381124	4	49	19381124*	8	49			—	○	6
278	夢土(1)	19381125	3	49	19381125	3	49			○	○	1
279	夢土(2)	19381126	3	49	19381126	3	49			○	○	3
280	夢土(3)	19381127	3	49	19381127	3	50			○	○	1
281	夢土(4)	19381129	3	49	19381129	3	50			○	○	—
282	夢土(5)	19381130	3	50	19381130	3	50			○	○	2
283	夢土(6)	19381201	3	50	19381201	3	50			○	○	1
284	夢土(7)	19381202	3	50	19381202	3	50			○	○	3
285	花ちり・花開く(1)	19381203	3	51	19381203	3	51			—	○	2
286	花ちり・花開く(2)	19381204	3	51	19381204	3	51			○	○	4

287	花ちり・花開く(3)	19381206	3	51	19381206	3	51				—	○	3
288	花ちり・花開く(4)	19381207	3	51	19381207	3	51				○	○	3
289	花ちり・花開く(5)	19381208	3	51	19381208	3	51	○	○	○	○	○	2
290	逃げ水の記(1)	19381209	3	52	19381209	3	52				—	○	2
291	逃げ水の記(2)	19381210	3	52	19381210	3	52				○	○	3
292	逃げ水の記(3)	19381211	3	52	19381211	3	52				○	○	2
293	逃げ水の記(4)	19381213	3	52	19381213	3	52				○	○	2
294	逃げ水の記(5)	19381214	3	52	19381214	3	52				○	○	2
295	逃げ水の記(6)	19381215	3	52	19381215	3	52				—	○	2
296	逃げ水の記(7)	19381216	3	52	19381216	3	52				—	○	3
297	逃げ水の記(8)	19381217	3	52	19381217	3	52				—	○	2
298	逃げ水の記(9)	19381218	3	52	19381218	3	52				—	○	4
299	栄達の門(1)	19381220	3	52	19381220	3	52				—	○	4
300	栄達の門(2)	19381221	3	52	19381221	3	52				—	○	3
301	栄達の門(3)	19381222	3	52	19381222	3	52				—	○	2
302	栄達の門(4)	19381223	3	53	19381223	3	53				—	○	1
303	栄達の門(5)	19381224	3	53	19381224	3	53				○	—	4
304	栄達の門(6)	19381225	3	53	19381225	3	53				○	○	3
305	天音(1)	19381227	3	54	19381227	3	53				—	○	2
306	天音(2)	19381228	3	54	19381228	3	53				○	○	3
307	天音(3)	19381229	3	54	19381229	3	53				—	○	1
308	天音(4)	19381230*	12	54	19381230*	6	53				○	—	2
309	篇外として	19381231*	12	54	19381231*	4	54				—	○	3
310	春告鳥(1)	19390101	16	55	19390101*	15	55				○	○	2
311	春告鳥(2)	19390102*	12	55	19390102*	11	55				○	○	4
312	春告鳥(3)	19390104*	12	55	19390104*	8	55				—	○	5
313	春告鳥(4)	19390105	3	55	19390105	3	55				○	○	2
314	春告鳥(5)	19390106	4	55	19390106	3	55				○	—	2
315	奔牛(1)	19390107	3	56	19390107	3	55				○	○	2
316	奔牛(2)	19390108	3	56	19390108	3	55				○	○	4
317	奔牛(3)	19390110	3	56	19390110	3	56				○	○	4
318	奔牛(4)	19390111	3	56	19390111	3	56	○	○	○	○	○	3
319	奔牛(5)	19390112	3	56	19390112	3	56				○	○	5
320	麻の胚子(1)	19390113	3	57	19390113	3	56				—	○	2
321	麻の胚子(2)	19390114	3	57	19390114	3	57				○	○	3
322	麻の胚子(3)	19390115	3	57	19390115	3	57				—	○	4

323	麻の胚子(4)	19390117	3	57	19390117	3	57			○	○	4
324	麻の胚子(5)	19390118	3	57	19390118	3	57			—	○	6
325	麻の胚子(6)	19390119	3	57	19390119	3	57			—	○	1
326	麻の胚子(7)	19390120	3	57	19390120	3	57			—	○	1
327	草埃(1)	19390121	3	58	19390121	3	58			○	—	8
328	草埃(2)	19390122	3	58	19390122	3	58			○	○	2
329	草埃(3)	19390124	3	58	19390124	3	58			○	—	2
330	草埃(4)	19390125	3	58	19390125	3	58			○	○	4
331	草埃(5)	19390126	3	58	19390126	3	58			○	○	3
332	童心地描図(1)	19390127	3	59	19390127	3	59			○	○	3
333	童心地描図(2)	19390128	3	59	19390128	3	59			—	○	2
334	童心地描図(3)	19390129	3	59	19390129	3	59			○	○	1
335	童心地描図(4)	19390131	3	59	19390131	3	59			—	○	3
336	大日(1)	19390201	3	60	19390201	3	59			○	○	2
337	大日(2)	19390202	3	60	19390202	3	60			—	○	3
338	大日(3)	19390203	3	60	19390203	3	60			○	○	—
339	大日(4)	19390204	3	60	19390204	3	60			○	○	2
340	古今逍遙(1)	19390205	3	61	19390205	3	60			—	○	3
341	古今逍遙(2)	19390207	3	61	19390207	3	61			○	○	—
342	古今逍遙(3)	19390208	3	61	19390208	3	61			○	○	5
343	古今逍遙(4)	19390209	3	61	19390209	3	61			○	○	2
344	古今逍遙(5)	19390210	3	61	19390210	3	61			○	○	3
345	紐(1)	19390211	3	62	19390211	3	62			—	○	2
346	紐(2)	19390212	4	62	19390212*	8	-		○	○	○	4
347	紐(3)	19390214	3	62	19390214	3	62			○	○	2
348	紐(4)	19390215	3	62	19390215	3	62			○	○	3
349	春・雨を帯ぶ(1)	19390216	3	63	19390216	3	63			○	○	2
350	春・雨を帯ぶ(2)	19390217	3	63	19390217	3	63			—	—	4
351	春・雨を帯ぶ(3)	19390218	3	63	19390218	3	63			○	○	2
352	春・雨を帯ぶ(4)	19390219	3	63	19390219	3	63			○	○	2
353	春・雨を帯ぶ(5)	19390221	3	63	19390221	3	63			—	○	4
354	春・雨を帯ぶ(6)	19390222	3	63	19390222	3	63			—	○	3
355	春・雨を帯ぶ(7)	19390223	3	63	19390223	3	63			—	○	4
356	春・雨を帯ぶ(8)	19390224	3	63	19390224	3	63			○	○	1
357	春・雨を帯ぶ(9)	19390225	3	63	19390225	3	63			○	○	2
358	港(1)	19390226	3	64	19390226	3	63			—	○	—

359	港(2)	19390228	3	64	19390228	3	64				○	○	3
360	港(3)	19390301	3	64	19390301	3	64				○	○	2
361	港(4)	19390302	3	64	19390302	3	64				○	○	4
362	港(5)	19390303	3	64	19390303	3	64				—	○	1
363	港(6)	19390304	3	64	19390304	3	64				○	○	4
364	港(7)	19390305	3	64	19390305	3	64				○	○	3
365	熱湯(1)	19390307	3	64	19390307	3	64				○	○	1
366	熱湯(2)	19390308	3	65	19390308	3	64				○	○	2
367	熱湯(3)	19390309	3	65	19390309	3	64				○	○	4
368	熱湯(4)	19390310	3	65	19390310	3	64		○	○	○	○	4
369	熱湯(5)	19390312	3	65	19390311	3	65				○	○	2
370	熱湯(6)	19390313	3	65	19390312	3	65				—	○	2
371	熱湯(7)	19390314	3	65	19390314	3	65				○	○	5
372	無可先生(1)	19390315	3	66	19390315	3	65				○	○	10
373	無可先生(2)	19390316	3	66	19390316	3	65				○	○	2
374	無可先生(3)	19390317	3	66	19390317	3	65				○	○	3
375	無可先生(4)	19390318	3	66	19390318	3	66				—	—	4
376	無為の殻(1)	19390319	3	67	19390319	3	67				△	○	12
377	無為の殻(2)	19390321	3	67	19390321	3	67				—	○	4
378	無為の殻(3)	19390322	4	67	19390322	3	67				△	○	2
379	無為の殻(4)	19390323	3	67	19390323	3	67				—	○	2
380	無為の殻(5)	19390324	3	67	19390324	3	67				○	○	2
381	芋環(1)	19390325	3	68	19390325	3	67				—	○	1
382	芋環(2)	19390326	3	68	19390326	3	68				○	○	1
383	芋環(3)	19390328	3	68	19390328	3	68				—	○	4
384	芋環(4)	19390329	3	68	19390329	3	68				—	○	4
385	芋環(5)	19390330	3	68	19390330	3	68				—	○	4
386	芋環(6)	19390331	3	68	19390331	3	68				○	○	2
387	芋環(7)	19390401	3	68	19390401	3	68				—	○	5
388	芋環(8)	19390402	3	68	19390402	3	68				—	○	4
389	芋環(9)	19390405	3	68	19390405	3	68				○	○	7
390	芋環(10)	19390406	3	68	19390406	3	68				○	○	2
391	円(1)	19390407	3	69	19390407	3	68				○	—	8
392	円(2)	19390408	3	69	19390408	3	69				—	○	4
393	円(3)	19390409	3	69	19390409	3	69				○	○	9
394	円(4)	19390411	3	69	19390411	3	69	○	○	○	○	○	7

395	飾磨染(1)	19390412	3	70	19390412	3	69			○	○	5
396	飾磨染(2)	19390413	3	70	19390413	3	70			—	○	5
397	飾磨染(3)	19390414	3	70	19390414	3	70			△	○	6
398	飾磨染(4)	19390415	3	70	19390415	3	70			—	○	5
399	飾磨染(5)	19390416	3	70	19390416	3	70			○	○	4
400	風便り(1)	19390418	3	71	19390418	3	71			—	○	2
401	風便り(2)	19390419	3	71	19390419	3	71			△	○	4
402	風便り(3)	19390420	3	71	19390420	3	71			○	○	3
403	風便り(4)	19390421	3	71	19390421	3	71			○	○	1
404	風便り(5)	19390422	3	71	19390422	3	71			—	○	2
405	風便り(6)	19390423	3	71	19390423	3	71			○	○	1
406	風便り(7)	19390425	3	71	19390425	3	71			○	○	4
407	風便り(8)	19390426	4	71	19390426	3	71			○	—	2
408	風便り(9)	19390427	3	71	19390427	3	71			○	○	3
409	風便り(10)	19390428	3	71	19390428	3	71			○	○	1
410	観音(1)	19390429	3	72	19390429	3	71			○	○	1
411	観音(2)	19390430	4	72	19390430*	8	-			—	○	2
412	観音(3)	19390502	3	72	19390502	3	72			—	○	1
413	観音(4)	19390503	3	72	19390503	3	72	○		○	○	3
414	観音(5)	19390504	3	72	19390504	3	72			○	○	4
415	観音(6)	19390505	3	72	19390505	3	72			—	○	3
416	観音(7)	19390506	3	72	19390506	3	72			○	○	4
417	世の潮路(1)	19390507	3	73	19390507	3	73			○	○	4
418	世の潮路(2)	19390509	3	73	19390509	3	73			○	—	3
419	世の潮路(3)	19390510	3	73	19390510	3	73			○	○	1
420	世の潮路(4)	19390511	3	73	19390511	3	73			○	○	3
421	世の潮路(5)	19390512	3	73	19390512	3	73			○	○	7
422	世の潮路(6)	19390513	3	73	19390513	3	73			○	○	5
423	待宵舟(1)	19390514	3	74	19390514	3	73			—	○	5
424	待宵舟(2)	19390516	3	74	19390516	3	74			—	○	4
425	待宵舟(3)	19390517	3	74	19390517	3	74			○	○	3
426	待宵舟(4)	19390518	3	74	19390518	3	74			—	○	4
427	待宵舟(5)	19390519	3	74	19390519	3	74			○	○	3
428	待宵舟(6)	19390520	3	74	19390520	3	74			○	○	3
429	待宵舟(7)	19390521	3	74	19390521	3	74			—	○	3
430	鷹と女と(1)	19390523	3	75	19390523	3	75			○	○	2

431	鷹と女と(2)	19390524	3	75	19390524	3	75				—	○	3
432	鷹と女と(3)	19390525	3	75	19390525	3	75				—	○	3
433	鷹と女と(4)	19390526	3	75	19390526	3	75				—	○	1
434	鷹と女と(5)	19390527	3	75	19390527	3	75				—	○	5
435	十三日前(1)	19390528	3	75	19390528	3	75		○	○	—	—	6
436	十三日前(2)	19390530	3	76	19390530	3	76			○	○	—	1
437	十三日前(3)	19390531	3	76	19390531	3	76			○	○	—	2
438	十三日前(4)	19390601	3	76	19390601	3	76			—	○	—	3
439	十三日前(5)	19390602	3	76	19390602	3	76			△	○	—	6
440	十三日前(6)	19390603	3	76	19390603	3	76			○	○	—	4
441	馬の草鞋(1)	19390604	3	76	19390604	3	76			—	○	—	6
442	馬の草鞋(2)	19390606	3	77	19390606	3	77			—	○	—	3
443	馬の草鞋(3)	19390607	3	77	19390607	3	77			—	○	—	2
444	馬の草鞋(4)	19390608	3	77	19390608	3	77			○	—	—	4
445	馬の草鞋(5)	19390609	3	77	19390609	3	77			—	○	—	2
446	馬の草鞋(6)	19390610	3	77	19390610	3	77			—	○	—	4
447	馬の草鞋(7)	19390611	3	77	19390611	3	77			○	—	—	4
448	馬の草鞋(8)	19390613	3	77	19390613	3	77			—	○	—	4
449	日出る頃(1)	19390614	3	78	19390614	3	78			—	○	—	3
450	日出る頃(2)	19390615	3	78	19390615	3	78			○	○	—	2
451	日出る頃(3)	19390616	3	78	19390616	3	78			○	○	—	4
452	日出る頃(4)	19390617	3	78	19390617	3	78			○	○	—	2
453	彼の人・この人(1)	19390618	3	79	19390618	3	78			○	○	—	2
454	彼の人・この人(2)	19390620	3	79	19390620	3	79			○	○	—	4
455	彼の人・この人(3)	19390621	3	79	19390621	3	79			—	○	—	5
456	彼の人・この人(4)	19390622	3	79	19390622	3	79			—	○	—	6
457	彼の人・この人(5)	19390623	3	79	19390623	3	79			○	○	—	8
458	彼の人・この人(6)	19390624	3	79	19390624	3	79			○	○	—	6
459	彼の人・この人(7)	19390625	3	79	19390625	3	79			○	○	—	5
460	彼の人・この人(8)	19390627	3	79	19390627	3	79			—	○	—	9
461	彼の人・この人(9)	19390628	3	79	19390628	3	79			○	○	—	3
462	彼の人・この人(10)	19390629	3	79	19390629	3	79			△	○	—	15
463	彼の人・この人(11)	19390630	3	79	19390630	3	79			—	○	—	5
464	魚歌水心(1)	19390701	3	80	19390701	3	80			△	○	—	1
465	魚歌水心(2)	19390702	3	80	19390702	3	80			△	○	—	4
466	魚歌水心(3)	19390704	3	80	19390704	3	80			○	—	—	3

467	魚歌水心(4)	19390705	3	80	19390705	3	80			○	○	5
468	魚歌水心(5)	19390706	3	80	19390706	3	80			—	○	4
469	魚歌水心(6)	19390707	3	80	19390707	3	80	○	○	△	○	21
470	魚歌水心(7)	19390708	3	80	19390708	3	80			—	○	9
471	魚歌水心(8)	19390709	3	80	19390709	3	80			○	○	6
472	魚歌水心(9)	19390711	3	80	19390711	3	80			○	○	1
(合計枚数)								318	433	1479		

※ 1 : 「『宮本武蔵』挿絵集」(後掲:注 12) には、「星の中(1)」のキャプションが付された挿絵が掲出されているが、下記※ 2 との取り違えだと思われる。

※ 2 : 「『宮本武蔵』挿絵集」(後掲:注 12) では、「星の中(1)」として掲げられた挿絵は、正しくは「星の中(2)」である。

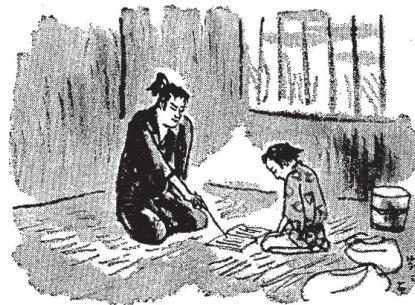
※ 3 : 『茨城県近代美術館所蔵作品図録 1997』(後掲:注 14) に「新聞掲載は別作品」とあるように、画題を異にしている。なお、『『宮本武蔵』挿絵集』収録の挿絵とは同一画題である。

III

前節までに確認した、吉川英治『宮本武蔵』のために描かれた石井鶴三挿絵の概要をふまえつつ、具体的な挿絵制作のプロセスの一端について検討してみたい。ここで重要な手がかりとなるのが、松本市美術館所蔵の石井鶴三画稿である。前節で掲げた〔表〕では、『宮本武蔵』掲載日ごとの挿絵と画題の一致が確認できた画稿枚数を示したが、ここでは、画稿それぞれを画像として掲げ、新聞紙面に掲出された挿絵との比較・検討を試みていきたい⁽¹⁵⁾。

なお、松本市美術館所蔵の画稿については、制作時期はいずれも未詳で、従って、新聞掲載挿絵のための画稿か、その後の単行本や挿絵集のためものかについては、画それ自体の特徴や差異から検証するほかに、目下のところ手立てがない（サイズ、筆記用具等は、確認可能だった範囲で記載していく）。

第一にとりあげるのは、『宮本武蔵』「この師の弟子（2）」にあたる新聞掲載挿絵、および、その画稿4枚である。『東京朝日新聞』に掲出された挿絵は、〔図1-1〕である。ここで師とは宮本武蔵、弟子とは伊織のことである。悪天候の際、外での仕事が出来ないことを悟った伊織が、自ら書物をもってきて、武蔵に教えを乞う場面である。この画題を描いた画稿としては、以下の4枚が確認できている。



〔図1-1〕『東京朝日新聞』1938年5月4日



〔図1-2〕2003715



〔図1-3〕2004221



〔図1-4〕20004063



〔図1-5〕T-2170

以上の4枚が、「この師この弟子（2）」の画稿だが、ここでは〔図1-2〕～〔図1-5〕を制作順と仮定して検討していく。家屋に向き合う人物2人という構図がみられる〔図1-2〕(247×333 mm)で注目すべきは、座した伊織の姿勢である。背を正した姿勢と、書物に視線を向ける前傾姿勢の2案が描かれている。おそらく、この段階では、武蔵も書物に視線を向けてはおらず、伊織と向きあう姿勢をとっていた。新聞掲載挿絵も含め、その他の画稿ではいずれも、伊織も武蔵も書物に視線を向いていることから考えると、〔図1-2〕において伊織の姿勢の変更が決められたものと推察される。それ以降は、武蔵も書物に視線を向けた挿絵が描かれていく。〔図1-3〕(246×337 mm)と〔図1-4〕は先後関係を決めるのが難しいが、2人の人物に注目し、身体の線が定まった〔図1-4〕を後に描かれたものと考えることとした。〔図1-3〕では、屋内の背景も含め、構図を一通り図案化した上で後、〔図1-4〕(247×337 mm)では改めて人物のみをピックアップして整え、その後に、完成稿にごく近しい〔図1-5〕に至ったものと推測される。

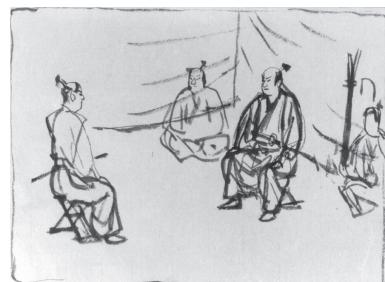
第二としてとりあげるのは、『宮本武蔵』「鷺（3）」にあたる新聞掲載挿絵、および、その画稿4枚である。『東京朝日新聞』に掲出された挿絵は、〔図2-1〕である。弓場にいる細川忠利に、角兵衛が佐々木小次郎を取りつごうとする場面である（小次郎は、物干竿と称される長い刀を家臣に預けている）。右手に座っているのが忠利とその家来、左手に座っているのが小次郎である。この画題を描いた画稿としては、以下の4枚が確認できている。



〔図2-1〕『東京朝日新聞』1938年8月18日



〔図2-2〕2004245



〔図2-3〕2003760



〔図2-4〕2003514



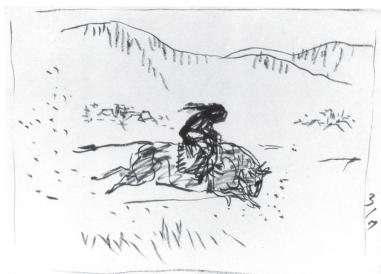
〔図2-5〕2004246

以上の4枚が、「鷺(2)」の画稿だが、ここでは〔図2-2〕～〔図2-5〕を制作順と仮定して検討していく。〔図2-2〕(247×336 mm)では中心人物2人の配置が決められ、〔図2-3〕(255×338 mm)では、中心人物2人にくわえて家来の配置も決まり、全体の構図ができあがっている。ここでも画稿の制作順は推測の域を出ないが、忠利の右袖や顔の向き・表情などから推測するに、〔図2-4〕→〔図2-5〕→〔図2-1〕と完成に向けて仕上げられていったようみえる。そう考えれば、〔図2-4〕(246×337 mm)では忠利の画を練って線として完成させ、その上で、〔図2-5〕(254×338 mm)において改めて全体を描いたように見える。ここにおいて、はじめて刀を捧げて控える家来の顔が描かれ、刀も新聞掲載挿絵に近くなる。

第三としてとりあげるのは、『宮本武蔵』「奔牛(3)」にあたる新聞掲載挿絵、および、その画稿4枚である。『東京朝日新聞』に掲出された挿絵は、〔図3-1〕である。ここでは、牛に乗ったお通が、丑之助とともに山道を行くと、三人組の牢人に呼びとめられる。丑之助が攻撃を仕掛けた結果、驚いた牛が、お通を乗せたまま駆けだしたという場面が図案化されている。この画題を描いた画稿としては、以下の4枚が確認できている。



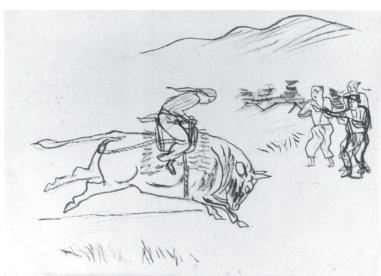
〔図3-1〕『東京朝日新聞』1939年1月10日



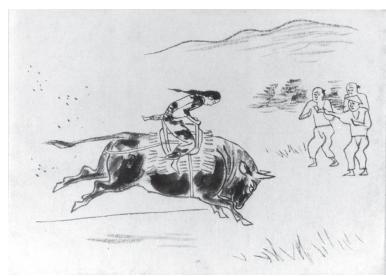
〔図3-2〕2003267



〔図3-3〕2003550



〔図3-4〕2004117



〔図3-5〕2003267

以上の4枚が、「奔牛（3）」の画稿だが、ここでは〔図3-2〕～〔図3-5〕を制作順と仮定して検討しておく。〔図3-2〕(246×337 mm)では、山を背景として、お通を乗せた牛が中央に配置される。この段階では、牛のサイズやしっぽの長さなどが〔図3-1〕とはずいぶん異なるが、それでも背景も含めた主要な要素は構図として出そろっている。〔図3-3〕(247×336 mm)では、いまだお通の体勢についてはゆれているが、背景が描きこまれた上に、右側に牢人も描かれる。〔図3-4〕(和紙に鉛筆と墨、247×336 mm)になると、背景がシンプルになり、牛とお通の形もほぼ決まり、三人の牢人も顔まで描かれる。〔図3-5〕(246×337 mm)になると、さらにお通の着物や牛の色味までが決まり、牢人たちも明確に線描され、さらには背景や、草、牛の影などの細部も、新聞掲載挿絵にかなり近づいている。

最後に第四としてとりあげるのは、『宮本武蔵』「無為の殻（1）」にあたる新聞掲載挿絵、および、その画稿4枚である。『東京朝日新聞』に掲出された挿絵は、〔図4-1〕である。これ以前、名声を高めた武蔵は、周囲の人々の推挙で徳川家に仕官の運びとなるが、直前で頓挫してしまう。その後、小説内で武蔵の消息は不明となるのだが、「迷ひ」を説くために山にこもっていたとされる際の武蔵の、「道」を求めて苦悩する様子が図案化されたのが〔図4-1〕である。

この画題を描いた画稿としては、12枚確認できているが、そこから縦型のものや彩色がほどこされているものをのぞき、以下の4枚について検討していきたい。



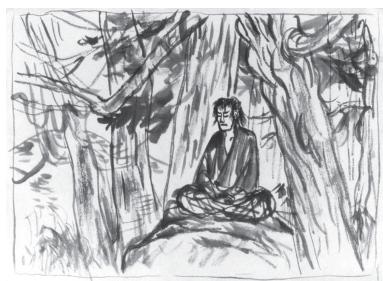
[図4-2] 2003361



[図4-1] 『東京朝日新聞』 1939年3月19日



[図4-3] 2003824



[図4-4] 2003279



[図4-5] 2004146

以上の4枚が、ここで検討したい「無為の殻（1）」画稿だが、制作順については推定すら困難である（一応は、[図4-2]～[図4-5]を制作順と仮定して配置することとした）。[図4-2]（246×336mm）では、すでにこの挿絵に関する最小限のモチーフが、構図とあわせて提示されている。ここでモチーフとは、中央に座する武蔵、武蔵が座る岩、さらには武蔵を囲う山の木々、の三点である。[図4-3]（246×337mm）では、すでに木々が書きこまれているが、武蔵の表情・髪型・服装にも注目したい。ここに掲出した4点のうちでは、この表情・服装が、最も[図4-1]に近いようである。[図4-4]（247×336mm）では、やはり木々の書き込みと、特に中央上部のはみでるように書かれた巨木については、[図4-1]との類似が明らかである。[図4-5]（245×335mm）は、ここまでみてきた鶴三画稿の検討から考えれば、線の完成度が最も高いものと判じられようが、木々や岩に[図4-1]と異なる点が多いことにくわえ、武蔵の表情・髪型にいおいても相違は明らかである。してみれば、手持ちの情報からこれらの挿絵について、制作順を考察することは困難なのだが、それは別言すれば、この挿絵については小説本文による規制が少ないことにもよる。つまり、この挿絵については、挿絵画家の読解力・想像力が羽ばたく領域が広いことも関わる。

というのも、この挿絵に関わる吉川英治による初出小説本文「無為の殻（一）」（1939.3.19夕）の記述は、時や場所を限定しない、きわめて曖昧なものだからだ。「去年、——柳營に士官の望みを絶つて、伝送やしきの半双の屏風に、武蔵野之図を一掃に書き残したま、江戸の地を去つた武蔵は、あれから何う道どりを取つて来たか」と興味を喚起する語り手は、しかし「武蔵野の西郊を、相模川の果まで行くと、厚木の宿から、大山、丹沢などの山々が面に迫つて来る。／彼の姿は、そこから先、暫くのあひだ、どこでどう暮してゐたか分らない」とする。その上で、いつ・どこで、といった具体的な条件を不分明にしたまま、しかし空白期間中の武蔵の苦悩は、次のように書かれていく。

ほうとうくめん
文字どほりな蓬頭垢面を持つた彼が、約ふた月程後、山から里へ下りて來た。何か或る一つの迷ひを解くために、山へ籠つたらしかつたが、冬山の雪に追はれて下りて來た彼のその顔には、山に入る前より苦しげな迷ひが刻みこまれてゐた。

解けないものが次々に彼の心を虐む。一つ解くと又一つの迷ひに逢着する。そしてまつたく、剣も心も、空虚になる。

『だめだ』

自分で自分を、時にはまつたく、嘆声の下に、見捨てかける時すらあつた。〔略〕

時には、さもしい、浅ましい、餓鬼のやうな煩惱の中に。又時には、澄み返つた、峰の月のやうに、孤高を独り樂むほど潔い気もちになつたり——朝に夕に、濁つては澄み、澄んでは濁り、彼の心は、その若い血は、余りに多情であり、多恨であり、又、躁がし過ぎた。

あらはれる彼の剣も、まだ／＼彼が自分で、

『可』

と、思ふ域には達してゐないのでつた。その道の遠さ、未熟さが、自分には、余りに分りすぎであるので、時折の迷ひと、苦悶とが、烈しく襲つてくるのだった。

山に入つて、心が澄めば澄むほど、里を恋ひ、女を思ひ、徒らに、若い血が狂ひさうになる。木の実を喰べても、瀧水を浴びて、いかに肉体を苦しめてみても、お通を夢みて、うなされる。（3面）

おそらくは、こうした場面を鶴三が総合的に読み取り、集約的に图案化したものこそが、[図4-1]なのだ。それゆえにこの挿絵は、この場面の挿絵であるとともに、『宮本武蔵』全体における、「道」を目指す武蔵の苦悩、自己修養を代表=体現する含みをもっている。

以上、石井鶴三による4枚の『宮本武蔵』挿絵を、松本市美術館所蔵の画稿と比較しながら検討してきたが、鶴三が挿絵を完成稿にむけて制作していくプロセスや、表現の幅、何度も描き直していたポイントなどについて、新たな知見を得ることができたように思う。もとより、『宮本武蔵』挿絵画稿はここでとりあげたものに限らず多く保存されているし、図像学的な観点も含めて、さらに多様なアプローチを試みていくこともできる資料だといえる。

IV

以上、本稿では、石井鶴三による吉川英治『宮本武蔵』挿絵を軸に、アクセス可能な資料と松本市美術館所蔵の画稿調査に即して、それらを一望する〔表〕を作成し、また、画稿の比較検討も試み、鶴三挿絵について研究基盤の整備を進めてきた。もとより、挿絵画家としての石井鶴三については、断片的な研究こそ散見される⁽¹⁶⁾ものの、鶴三挿絵の作品数や新聞（読者）を通じての流通（量）、世評の高さなどに比するならば、研究の遅れは明らかである。しかも、本稿では、吉川英治『宮本武蔵』に焦点を絞って検討してきたが、これをモデル・ケースとすることによって、文学、美術、さらにはメディア論にもまたがる新聞連載小説という問題領域について、文字通り領域横断的な研究へと視界をひらく契機ともなるだろう。

以下、本稿を足がかりとした研究展望を、簡潔に提示して結論にかえたい。

第一に、文学と美術の協働という問題領域がある。いいかえれば、文学研究の立場・方法論から新聞小説挿絵へのアプローチであり、小説（文字）にくわえて挿絵（図像）も含めた意味作用や読者による受容を問題化していくものである⁽¹⁷⁾。『宮本武蔵』挿絵に即していえば、まずは当該連載回における小説と挿絵について、どのようにして画題が選択されたのか、その種別や傾向、本文内容との一致／不一致の確認、さらにはそれらを総じて、鶴三挿絵が『宮本武蔵』の意味作用／受容にどのように関わっていくか、といった課題などが考えられる⁽¹⁸⁾。

第二に、挿絵画家・石井鶴三に軸足を置いた、挿絵制作の実体解明というも問題領域がある。小説（家）との関わりを考えれば、『宮本武蔵』挿絵執筆を承引した経緯や、連載中の詳細な制作過程⁽¹⁹⁾、小説家と挿絵画家の挿絵に関するヘゲモニー⁽²⁰⁾など、挿絵に絞れば、版画としての挿絵の筆記用具や紙も含めた製版・印刷からの検討などといった課題が考えられる。

第三としては、鶴三挿絵を、文字通り図像として分析するという問題領域がある。『「宮本武蔵」挿絵集』をみればわかる通り、鶴三の挿絵はその連なり自体が物語性をもっており、個々の挿絵にくわえ、前後するものや同一人物の場面ごとの比較など、複数の挿絵の関係性の検討などが、まずは課題としてあげられよう。ほかにも、今回、掘り起こした画稿なども視野に入れれば、画稿も含めた同一画題のバリエーションの比較分析などは興味深い検討課題である。さらには、吉川英治作はもとより、『宮本武蔵』（作品名）／宮本武蔵（登場人物）といった時に浮かぶ登場人物たちのビジュアル・イメージの原型として、鶴三挿絵の与えた影響を考えていくことなどもできるだろう⁽²¹⁾。

総じて、新聞小説挿絵とは、制作当時においても小説家と挿絵画家を中心にさまざまな職能をもつ人々の連携によってつくられ、新聞を介して多くの読者の目にふれた、その意味で歴史的な文化の結節点でもあった。それゆえに、研究の困難さもあるが、挿絵という研究対象は、その実態に応じて、領域横断的なアプローチによって多角的に検討していくべき問題領域だといえる。本稿における基礎的研究が、その足がかりとなれば幸いである。

注

- （1）挿絵画家としての石井鶴三については、拙論「挿絵画家・石井鶴三とその評価」（信州大学附属図書館編

- 『「時代小説作家と挿絵画家・石井鶴三」展・資料集』(信州大学附属図書館, 2012) ほか参照。
- (2) 吉川英治「序」(『宮本武蔵 第一巻』中央公論社, 1960), 頁記載なし。
 - (3) 吉川英治「鶴三氏の挿絵」(石井鶴三『宮本武蔵』挿絵集)朝日新聞社, 1943), 1頁。
 - (4) 注(3)と同じ, 2頁。
 - (5) 尾崎秀樹「『宮本武蔵』の挿絵」(『石井鶴三全集 第七巻』形象社, 1987), 47頁。
 - (6) 後には、鶴三の書いた『宮本武蔵』挿絵をテーマとした展覧会も催された。茨城県近代美術館編『描かれた武蔵 石井鶴三挿絵の世界』(茨城県近代美術館, 2003) 参照。
 - (7) 本稿は、既発表の拙論「昭和一〇年代における吉川英治『宮本武蔵』論序説——同時代評価と石井鶴三挿絵」(『信州大学附属図書館研究』2016.1), 「吉川英治『宮本武蔵』(後半)における“道”——パラテクストと石井鶴三挿絵」(『信州大学附属図書館研究』2018.1)と、参照した資料を含め、一部論点が重複している。また、同様の問題関心を異なる挿絵画家について展開した、拙論「挿絵画家としての中村研一——『海燕』『女の一生』『春の行列』『花と兵隊』」(『大衆文化』2019.3) もあわせて参照されたい。
 - (8) この間の吉川英治に関して、拙論「異彩の特派員・吉川英治——事変報道と新聞連載小説『迷彩列車』を視座として」(『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会, 2018) 参照。
 - (9) なお、1938年12月30日、同年同月31日、1939年1月2日、同年同月4日掲載分の4回は、例外的に朝刊に掲載された。
 - (10) ほとんどのタイトルカットは、「『宮本武蔵』タイトルカット(決定稿)」(『石井鶴三展——芸道は白刃の上を行くが如し——』松本市美術館, 2009, pp.234-237)に掲出されているが、本稿の〔表〕でいう連載回数7, 11, 35, 76, 77, 79, 80の7枚は掲載されていない。
 - (11) 石井鶴三「巻末に」(『宮本武蔵』挿絵集)朝日新聞社, 1943), 頁記載なし。
 - (12) 「『宮本武蔵』挿絵集」(『石井鶴三全集 第八巻』形象社, 1987), 296~300頁。
 - (13) 注(11)と同じ。
 - (14) 所蔵状況・画像については、茨城県近代美術館編『茨城県近代美術館所蔵作品図録 1997』(茨城県近代美術館, 1997)を参照した。
 - (15) 同種の先駆的試みは、『石井鶴三展——芸道は白刃の上を行くが如し——』(松本市美術館, 2009, pp.232-233)において、「魚歌水心(六)・(八)・(九)」を題材に示されている。
 - (16) 「石井鶴三関連資料」を所蔵する信州大学附属図書館では、鶴三宛書簡を中心に、文学と挿絵の関係について調査が進められている。その成果の一端については、『信州大学附属図書館研究』[<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/publication.html>] 所収の各論を参照。
 - (17) 諸岡知徳「研究動向 挿絵と文学」(『昭和文学研究』2018.3) 参照。
 - (18) こうした分析の実例として、十重田裕一「『浅草紅団』の新聞・挿絵・映画——川端康成の連載小説の方法」(『文学』2013.7) はたいへん示唆的である。
 - (19) 石井鶴三の挿絵執筆状況の一端については『石井鶴三日記』(書誌事項)に記述があり、吉川英治の原稿を待ちながら挿絵を描いていた様相が彷彿とする。また、信州大学附属図書館所蔵の「石井鶴三関連資料」には、編集者が速記したと思われる「宮本武蔵」メモが含まれる。
 - (20) 今日において常識的に思われる、新聞小説における、小説／挿絵それぞれの自律性は、歴史的小説家と挿絵画家の力関係・慣習からすれば、昭和期に入ってもなお、それほど自明とはいえない。出口智之「新聞小説と挿絵に関する問題系——『大菩薩峠』をめぐる石井鶴三宛中里介山書翰から」(『信州大学附属図書館研究』2017.3) ほか参照。
 - (21) 吉川英治記念館・毎日新聞社編『吉川英治展 武蔵からバガボンドへ』(毎日新聞社, 2001) ほか参照。

謝辞 本稿は第一に、松本市美術館における石井鶴三『宮本武蔵』挿絵画稿調査(2017.6.23~2019.4.4)の報告である。調査に際しては、松本市美術館のみなさまに格別のご高配を賜った。大島武氏、稻村純子氏には調査のご相談の際からお世話になり、また、稻村氏には調査の際にも有益な示唆を多く頂戴した。この場を借りて、心からの御礼を申し上げます。なお、快く挿絵・画稿の掲出をお認め下さった、岩部定男氏、日本美術家連盟、松本市美術館にも、深謝申し上げたい。

※本研究はJSPS科研費JP16K02420・17K02462の助成を受けたものである。